世間解　第三九二号
令和二年十月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

ー学仏大悲心（仏の大悲心を学ぶ）六ー

十月です。今年はほとんど季節を感じないままこの月になったような気がいたします。

お同行さま方には各々のご縁の中でご本願のお念仏ご相続のことと存じます。

今年七回忌を迎えられた梯實圓和上の西法寺でのご法話、六回目になりました。毎月こうして書かせていただきながら私自身も改めてお育てに遇わせていただいています。西法寺のご法座はそれまで結びは「恩徳讃」をご唱和させていただいておりましたが、このご法話をしてくださった時から『お領解文』をあわせてご唱和させていただくようになったことでした。ありがたいご縁となった、平成二十五年十月十四日、梯實圓和上の西法寺でのご法話です。

何度も何度もご聴聞ください。

『…親鸞聖人がね、「私は有り難いことに、法然聖人のみ教えを聞いたおかげで、私も法然聖人も同じご信心をいただいて、同じお浄土へ生れさせていただける身にしていただいた。」いつ何時死がやってこようと、もうそんなことオタオタする必要は無い。臨終の善悪をば簡ばず。臨終が善かろうと悪かろうと、死ねるように死んだらそんでええんだ。いや死ぬんじゃなくて生れていくんだ。どんな息の切れ方をしようと、お浄土には関係ない。だから気楽なもんだ。おかげで法然聖人さまと同じお浄土へやっていただけることが有り難いと言われたんですよ。それを聞いておった兄弟子たちが、お前何て傲慢なことを言うんだと。法然聖人ともあろう方と、入門してきて三年から四年くらいしか経たないお前が法然聖人と同じ信心だ、だから同じお浄土へ生れて往くんだなんて、そんなことがぬけぬけと言えたもんだ、恐れ多いことを言う、お師匠さまに謝ってこいと、兄弟子たちが親鸞聖人を怒るわけです。そらそうでしょうね。いや～、

法然聖人も私はお会いしたことはないけども、おおらかな方だったようですけどね。外は柔らかい、優しいお方だったらしい。内側はね、テコでも動かんでてなとこあるけどな。殺されようと何しようと、おれの知ったこっちゃない。私は私の道を行くという剛気なところがある人だけどね。とにかく智慧第一の法然房といわれた、そんな法然聖人と私は同じ信心もっているとおっしゃったんです。

私たちも親鸞聖人と同じ念仏をいただいている。いただいとるからな～

“わしも親鸞聖人と同じとこへやってもらいます”と、言いなはれやみなさん。ここへ参ってきたら、今日何のために来てるのかっていうたら、報恩講や。報恩講に参って何いうねんいうたら、御開山さまありがとうございました、あなたのおかげで、私もあなたと同じお念仏いただいて、あなたと同じ信心いただいて、同じお浄土で今度は遇わせていただきます。そのときまたゆっくりとお礼申しあげますけども、今日はとりあえず他の人もお参りですさかいに、これだけでって。みんな一人ひとり代わってここでお礼言うのがほんとでっせ。これが領解出言。蓮如上人時代までは、実際にみんなここで転々ばらばら言うたんです。みんな一人ひとり自分の味わいを述べるもんだから、ワ～っと本堂の中割れるような声が響いとったって。それで一つにしよいうてお領解文。「もろもろの雑行雑修　自力のこころをふりすてて」っていうあの領解文を制定なさって、一斉に領解出言をするようになった。これ今でも報恩講のときには、必ず改悔批判ってのをやりますけど、前の年の安居の本講をしました勧学和上が「領解出言」と言われますと、みんな一斉に礼拝して「もろもろも雑行雑修自力のこころをふりすてて　一心に阿弥陀如来　われらが今度の一大事の後生御たすけそうらへとたのみもうして候う」っていうあのお言葉をみんなあげる。一人ひとりが言わないと、それを言うのが報恩講なんだ。だからみなさん、お領解文、もし忘れてはったら聖典に書いありますから、読んでもらって結構ですから、ここでみなさん自分で一人ひとりお領解出言して帰るんです。これが、報恩講にお参りしたという意味なんですよ。ただの法座と違うんです報恩講は。御開山にたすけていただいた御恩を報謝する御講やからな。…』

合　掌